



Japan Society of Civil Engineers

International Activities Center

国際センター通信 (No. 58)

土木学会 第 105 代会長 就任挨拶 「学会活動を世界のなかに定置する」

地球温暖化の影響からなのだろうが、地球の気象や気候が大きく変化してきている。海面上昇から来る危機に加え、強烈なハリケーンや台風、財産のすべてを吹き飛ばす竜巻、大洪水を生む豪雨の発生一方で、日照りが生じたり乾燥地が拡大しているなど、人間の生存を脅かすような自然現象の変化や大きな自然災害が世界各地で発生している。

わが国はこれに加えて地震活動の活発化が始まっているとされ、地域の高齢化や壮年人口の減少と相まって、世界のなかでも最も厳しい状況下にある。

偉大な自然の営みのなかで、なんとか人間の存在領域を確保するための知的生産の総体である「土木」は、志を同じくする世界の仲間が一体となってこれに対処し、土木の自然災害へのフロントを再構築する必要があると考える。

また、先進国を中心に、過去に築き上げてきたインフラの老朽化が始まっており、いかにして有用な資産として次世代に引き継いでいくのかが課題となっている。1980年代の「荒廃するアメリカ」問題は、現在、わが国を含む先進各国の共通テーマとなっている。

近年、IoT 技術が飛躍的に発展し始め、ビッグデータや AI を公物管理に利用することができるようになったのは幸運なことだった。危険の通知や崩壊の予兆把握、更新の手順とその箇所の発見などについては、こうした技術の導入と応用による世界的な技術競争の時代に入ることだろう。わが国の土木もそのなかで確固たる地位を占めたいのである。

技術競争があり知的刺激に満ちた世界には、優秀で意欲ある人材は必ず蝟集してくる。わが日本の土木は、その先端に立つ存在でありたいのである。



第 105 代会長 大石 久和

<略歴>

昭和 45 年 3 月 京都大学大学院工学研究科修士課程 修了
 昭和 45 年 4 月 建設省入省
 平成 5 年 4 月 国土庁計画・調整局総合交通課長
 平成 7 年 6 月 建設省道路局道路環境課長
 平成 8 年 7 月 建設省大臣官房技術審議官
 平成 11 年 7 月 建設省道路局長
 平成 14 年 7 月 国土交通省技監
 平成 16 年 7 月 財団法人国土技術研究センター理事長
 平成 25 年 6 月 一般財団法人国土技術研究センター国土政策研究所長
 平成 28 年 6 月 一般社団法人全日本建設技術協会会長
 現在に至る

【土木学会誌コラボ記事】

土木のアラムナイ — 日本ゆかりの方々とつながるページ — ベトナムでの日本土木のアラムナイ活動と 日越大学での社会基盤プログラムとの連携

ファン・レ・ビン 日越大学 JICA 長期専門家、講師

※アラムナイ (Alumni) は「同窓生たち」を表す英語です。

日本からの帰国留学生がベトナムで活躍

ベトナムへの援助が 1993 年に再開されたことをきっかけに、日本政府からの奨学金を受け、日本に渡る学部生と大学院生が増え続けた。政府以外の各種団体・組織からの奨学金を受けるケースと、私費留学生として留学するケースも多い。2015 年度にはベトナムからの留学生が中国に次ぐ 2 番目であり、38,882¹人 (全世界から日本への留学生の 18.7%¹) となった。留学の分野は情報、電気・電子、農業、経済、経営、環境、医学、法律など様々であり、土木の分野で勉強した者も少なくない。留学生受け入れ再開から 24 年経った今、卒業した留学生がベトナムに戻って、大学、政府機関、日本を含む外資系企業やベトナムの企業で働いている。早い者は帰国後 17~18 年経過し、大学では学長を、政府機関では局長を務めるケースも出はじめています。多くの場合は会社・組織の中の中堅幹部になっている。



Phan Le Binh

ベトナムでの日本土木出身者のアラムナイ活動

ベトナムの首都ハノイでは、土木分野で日本に留学した元留学生の人的ネットワークを強める目的で、元留学生 4~5 名の有志と日本大使館のインフラ分野担当の書記官によって 2015 年 10 月に「土木分野の日本留学生アラムナイ」が立ち上げられた。会合は 2~3 ヶ月毎に行なわれ、これまでに計 8 回実施され、毎回 15~30 名が参加した。気軽に参加できるよう、メンバー登録はせず、それぞれの基幹メンバー個人の



元留学生による発表

人脈で参加者を募っている。日本で土木分野を勉強した元留学生・研究員ならば、誰もが参加できる。これまで大学、行政機関、会社に勤めている元留学生が参加している。また、土木分野で仕事している JICA の専門家と国土交通省から日本大使館に派遣された書記官もほぼ毎回参加している。2016 年 12 月に開催された 7 回目の会合では元留学生が所属している会社・組織の同僚を意識し、元留学生が同伴した方も参加できるというルールを定めた。

会合はいつも午後の遅い時間帯に開催され、参加者数名が自分の仕事か研究に関わる内容の発表を行なった後に、ハノイ名物のビア・ホイ (地元産のアルコール度数が低いビール) 屋で親睦を深め

¹ (独) 日本学生支援機構のホームページ
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/index.html



ビア・ホイ屋での懇親会

ている。発表者の仕事が多様であるため、建設事業の品質管理にかかる行政機関の能力向上から、道路の維持管理体制や地下鉄の建設技術、耐候性鋼材の活用状況まで、様々な話を「友達からの発表」という感覚で聞くことができる。そして、もっとも大切なのは、日本留学時代の学友との交友を温めることができるほか、新しい人脈を築くことができるのである。さらに、新しくできた人脈から、日本企業とベトナムの大学との間に、仕事の契約が結ばれたケースも現れ始めた。

また、2017年3月に行なわれた第8回会合は、土木学会とハノイ土木大学が共催するセミナーとスケジュールを繋げて行なわれ、アラムナイの活動内容がより充実化したものとなった。

日越大学での社会基盤プログラムとの連携

筆者が講師を勤めている日越大学は日越両国の首脳が設立を合意した、日越の友好のシンボルであり、アジア有数の研究機関を目指すと共に、企業に対し、視野が広く、質の高い人材を提供することを主要な目的としている。2014年7月に、ベトナムの首相令によって設立された本大学は、約2年強の準備を経て、2016年9月から6プログラムで合計68名の修士コースの1期生を受け入れ、教育活動を展開した。教師の約半数(6プログラムで70~80名程度)は日本の約20大学からJICAの協カスキームを通じて派遣される。社会基盤プログラムは東京大学大学院社会基盤学専攻のサポートを受け、同専攻のカリキュラムの大部分を組み入れ、東京大学、筑波大学、昭和女子大学と茨城大学から教員を派遣してもらい、ベトナム国内のトップレベルの大学の教員と共に講義を提供している。授業はほぼすべて英語で行なわれている。また、初心者向けの日本語教育も実施している。筆者はハノイにいる際にはアラムナイに欠かさず参加し、2016年7月にはハノイに赴任した早々に、第5回の会合を日越大学の校舎で開催した。2016年9月以降は日越大学に学生が入学したため、アラムナイ会合が開催されるたびに社会基盤プログラムの学生に参加を促した。学生たちには先輩たちの仕事を学んでほしいだけでなく、大学内ではなかなか会うことがない方々とのネットワークを広げ、近い将来にはインターンや就職の際にアドバイスをもらい、遠い将来には技術者同士としてお互いに協力する関係に発展してほしいと思う。

《著者略歴》1973年生まれ、1993年~2003年に日本留学。東京大学で交通計画の博士号取得。国際協力機構(JICA)で12年間途上国の交通計画・都市計画を担当。2016年から現職。工博。土木学会平成25年度国際協力活動賞受賞。



《コラム》家田仁氏(政策研究大学院大学 教授、東京大学 名誉教授)

ファン・レ・ビンさんは、ハノイの高校を卒業して来日し、東大の学部と大学院の9年とその前の日本語研修1年のざっと10年にわたり、10代~20代という人生の最も多感な時期をわが国で過ごされた。留学生教育に力を注いできた東大土木においても極めて異色の人材である。その後、今日までわが国の国際協力事業に深く貢献。同氏の特長ともいえる仲間を大事にする精神とか困難の中でも物事を完遂する根性などは、映画『黒部の太陽』に象徴的にみられる「良き土木人」そのものである。それが、同世代の日本人卒業生たちよりもはるかに深く染みついているところが面白いところだ。東京芸大に留学していたピアニストの奥さんと結婚してから、ぐっと品が良くなったといわれている。

平成 28 年度ジョイントセミナー報告（インドネシア） 「ODA 社会資本整備事業事後評価における利用者視点導入」

土木学会建設マネジメント委員会、土木学会インドネシア分会、Himpunan Ahli Konstruksi Indonesia (HAKI：インドネシア土木・建築エンジニア協会)、および、Institut Teknologi Bandung (ITB：バンドン工科大学) の共催で、2017 年 3 月 30 日に「International Joint Seminar on Introduction of Users' Viewpoints in Post Appraisal of ODA Infrastructure Project」をバンドン工科大学 Center for Research and Community Services (CSRS：研究・コミュニティサービスセンター) で開催した。

ODA による社会基盤整備事業では、例えば維持管理が適切に実施されない等の理由で、当初の事業目的が十分に達成されない場合が散見される。本セミナーでは、ODA 事業における利用者視点考慮の状況と課題を収集・共有し、ODA 事業事後評価において利用者視点を考慮する方法を検討することを目的とした。

日本側からは、土木学会建設マネジメント委員会国際連携小委員会の横倉順治教授（東京工業大学）、山岡暁准教授（宇都宮大学）、鈴木泰之氏（(株)建設技術研究所）、五艘隆志准教授、渡邊（以上高知工科大学）、並びに、国際センター国際交流グループ インドネシアグループ担当の鹿野島秀行氏（国土技術政策総合研究所）の 6 名が参加した。

バンドン工科大学のキャンパス整備では、1990 年から日本の ODA 事業も実施されている。（ちなみにセミナー会場となった CSRS も日本の ODA による整備事業であった。）このため、今回のテーマは、事務局を担当して頂いたバンドン工科大学の教授・スタッフにとって、研究者・政策提言者としてだけでなく、ODA 事業の直接の担当者としても重要なテーマとなった。

セミナー前日夜の懇親会では、インドネシア建設マネジメント界の大御所であるバンドン工科大学の Rizal Tamin 教授が、セミナーには所用のため出席できないとの理由で、本テーマに関する講演・意見交換会を開催して下さった。

セミナー当日は 70 名を超える方々が出席して下さい、熱のこもった発表・意見交換が行われた。また、昼食休憩時には、ITB 学生によるアンクロンの素晴らしい演奏も行われた。

講演者および講演タイトルは以下のとおりである。



前日の懇親会



アンクロンによる演奏

2017 年 3 月 29 日（水）

Pre-Discussion - Introduction of Users' Viewpoints in Post Appraisal of ODA Infrastructure Project

Professor Rizal Z. TAMIN, ITB

2017 年 3 月 30 日（木）

<開会挨拶>

Professor WAWAN Gunawan, Vice Rector of Finance, Planning and Development, ITB

<基調講演>

1. Professor Junji YOKOKURA, Professor of Tokyo Institute of Technology;
“Post project evaluation from beneficiaries’ view point”
2. Dr. Muslinang Moestopo, Structure Engineering Research Group ITB, Board of Director of HAKI
“Overview of ODA Infrastructure Project Implementation in Indonesia”

<午前セッション>

1. Professor Satoshi YAMAOKA, Professor at Utsunomiya University
“Involvement of a partner country to evaluate Japan ODA funded projects”
2. Dr. Reini D Wirahadikusuma, Secretary of Construction Chapter, Persatuan Insinyur Indonesia (PII)
“Post Project Evaluation of JICA Project of ITB Development -3 Loan IP. 553”
3. Dr. Biemo W Sumardi, Vice Manager of Procurement Seven in one Project of Directorate General BELMAWA, Ministry of Research, Technology and Higher Education
“Lesson Learned from ODA Projects Implementation in the Ministry of Research, Technology and Higher Education Indonesia”
4. Dr. Akhmad Suraji, Committee member of International Cooperation Development, National Construction Service Development Board (LPJK)
“Evaluation of Indonesian contractor involvement in the implementation of ODA projects”

<昼食休憩> Angklung

<午後セッション>

5. Dr. Takashi GOSO, Kochi University of Technology
“A basic study on estimate of the introduction effects of CMR (Construction Manager) in Japanese public works”
6. Professor Puti Farida Marzuki, Former Vice Rector of Finance, Planning and Development, ITB
“Potential topics of research collaboration in construction for Infrastructure development”
7. Mr. Hideyuki KANOSHIMA, Head of International Research Division, NILIM, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism (MLIT)
“Research Cooperation on Civil Engineering Field between Indonesia and Japan”
8. Professor Tsunemi WATANABE, Professor Kochi University of Technology
“Motivation of construction engineers and users' satisfaction in infrastructure projects”

<閉会挨拶>

Tsunemi WATANABE

インドネシア側の発表者・事務局は、日本 ODA 事業に精通していると同時に、大きな感謝の念を抱いていることを感じた。同時に、日本の ODA 事業には幾つかの改善点が存在する。具体的には、バンドン工科大学キャンパス整備の場合、JICA は被援助側 (ITB) にキャンパス整備マスタープランの策定を要請した。ITB 側は、その策定に向けて努力したが、全利用者の視点を必ずしも充分に取り入れることが出来なかった。このため、構想・計画段階での十分な検討を経ることなく、設計が実施された。詳細設計の時点で、多くの利用者の不満が顕在化し、事業の円滑な進捗が困難となっているとの報告があった。これらの問題を解決するためには、援助側と被援助側の双方が協力して改善案を検討・実施していく必要が有る。その際、「ODA 社会資本整備事業事後評価における利用者視点導入」という今回のテーマは、重要な役割を果たすとの結論に至った。

今後は、ジョイントセミナーでの論点を JICA と共有・検討し、その結果をインドネシア側に投げ

かけることによって、ODA 社会資本整備事業事後評価における利用者視点導入の具体策を検討する予定である。

本ジョイントセミナーの開催に際しては、多くの方々のご支援を頂いた。特に、バンドン工科大学 調達局長で今回の事務局長を担って頂いた Dewi Larasat 准教授のご尽力に心から感謝申し上げる次第である。また、本ジョイントセミナー 公益信託土木学会学術交流基金による助成を受け、実施されたものである。ここに記して謝意を表する次第である。ありがとうございました。

(なお、本稿で記した、発表者・出席者の所属と役職は、セミナー時のものである。)



再会を期して

【記：建設マネジメント委員会 渡邊法美（高知工科大学）】

2016 年度土木学会国際関係賞の紹介

土木学会賞のうち国際関係の賞である、土木学会国際貢献賞、国際活動奨励賞、国際活動協力賞が、2017年6月9日の総会にて国内外の土木技術者23名に授与され、うち海外からは国際貢献賞に1名、国際活動協力賞に5名、計6名が受賞者となった。各賞の受賞者は以下の表のとおりである。<http://www.jsce-int.org/at/international>

<国際貢献賞> 計4名

日本国内外の活動を通じて、国際社会における土木工学の進歩発展あるいは社会資本整備に貢献し、その活動が高く評価された日本人、並びに日本の土木工学の発展あるいは日本の土木技術の国際交流に貢献したと認められた外国人に授与される。

氏名	所属
菊川 滋	(株)IHI
都甲 明彦	五洋建設(株)
土肥 穰	鹿島建設(株)
Mochamad Basoeki Hadimoeljono	インドネシア公共事業・国民住宅大臣

<国際活動奨励賞> 計14名

海外における土木工学の進歩発展あるいは社会資本の整備において、現地での土木技術の発展に寄与し、国際貢献への活動が今後とも期待される日本人に授与される。

氏名	所属	氏名	所属
大塚 洋一	(株)鴻池組	園部 直明	日本工営(株)
小川 智之	鹿島建設(株)	綱川 浩太	電源開発(株)
梶原 良治	大成建設(株)	中川 康之	(国研)海上・港湾・航空技術研究所
亀廻井 寿明	東急建設(株)	藤熊 昌孝	(株)オリエンタルコンサルタンツグローバル
川崎 隆	(株)大林組	松木 洋忠	国土交通省
小泉 幸弘	(独)国際協力機構(JICA)	松本 高之	清水建設(株)
下山 和彦	三井住友建設(株)	三輪 恭久	JFE エンジニアリング(株)

＜国際活動協力賞＞ 計5名

日本国内もしくはその他の国において、日本との交流・協力を通じて土木工学の進歩発展あるいは社会資本整備に寄与し、今後とも活躍が期待される外国人に授与される。

氏名	所属
Hassan Ammar	大成建設(株)
趙 勝川	大連理工大学
Somnuk Tangtermsirikul	Sirindhorn International Institute of Technology (SIIT)
Tuenjai Fukuda	Asian Transportation Research Society (ATRANS)
A.F.M. Saiful Amin	Bangladesh University of Engineering and Technology (BUET)

7月14日には国際センター主催のもと、国際貢献賞受賞者のモハメド・バスキ・ハディムリヨノインドネシア公共事業・国民住宅省大臣をお迎えし、フクラシア東京ステーションにて授与式およびお祝いの会を開催した。お祝いの会ではバスキ大臣よりご講演を賜った。

お知らせ

- ◆土木学会誌 2017年8月号の特集記事の概要をJSCEのWebsite（英語版）にアップしました。
<http://www.jsce-int.org/pub/magazine>
- ◆CECAR8（第8回アジア土木技術国際会議）のアブストラクト募集が始まりました。
<http://www.cecar8.jp/>
- ◆土木学会コンクリート委員会 ニュースレター No.50 が発行されました。
<http://www.jsce.or.jp/committee/concrete/e/newsletter/newsletter50/index.html>

配信申し込み

「国際センター通信」配信の申し込みは以下のURLよりお願いいたします。また、周囲の方に国際センター通信をご紹介いただければ幸いです。よろしくお願いたします。

「国際センター通信」配信希望者 登録フォーム

- ・日本語版：<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/31>
- ・英語版：<http://www.jsce-int.org/node/150>

英語版 Facebook

国際センターの英語版 Facebook です。直近の国際センターの活動について紹介していますので、ぜひご覧ください。（<https://www.facebook.com/JSCE.en>）

【ご意見・ご質問】：JSCE IAC: iac-news@jsce.or.jp

本通信をより話題性に富んだ内容にするため、皆様のご意見やコメントをお聞かせください。